

平成29年度 長野県信濃美術館協議会

日 時 平成29年 9月19日 (火)
午後 1時30分～
場 所 長野県信濃美術館 講堂

1 開 会

○奥村副館長

それでは、定刻となりましたので、ただいまから平成29年度長野県信濃美術館協議会を開催させていただきます。

私は本日の進行を務めさせていただきます、副館長の奥村賢三でございます。どうぞよろしくをお願いいたします。

なお、当協議会は公開で開催しておりますので、ご承知おき願います。

では初めに、長野県信濃美術館館長、橋本光明からごあいさつ申し上げます。

2 あいさつ

○橋本館長

本日はご多忙の皆様方ですから、今日の日程を決めるまで本当にご無理を申し上げて申しわけありません。ご都合つけていただきまして、ありがとうございます。

この協議会は年に2回開催ということになっておりますけれども、ご承知のとおり、東山魁夷館もかなり改修の規模が大きくなってきました。それで5月31日から休館しております。それからこの県立信濃美術館も、当然ながら全面改築ということになりまして、現在、展覧会を行っておりますが、終わった10月1日から、予定ですと約3年半の休館になります。

そういうことで、本来2回委員会を開かなければいけないのですが、こういった事情で、今年は1回、すなわちこの会議が最後であるということをご理解の上、貴重な時間ですので、よろしくお願ひしたいと思います。

それから開催の時期を、いろいろと考えました。一応、展覧会全部が終わってからの10月か11月ごろに開いたほうがいいかなとも思いましたけれども、現実には引越しが大変なんです。休館に入ったほうが職員は忙しいのではないかと思うほどです。この時期は無理だなと思ひまして、結果として、この9月の中旬になりました。

信濃美術館で行う最後の展覧会は、私たちにとっては感慨深いものがございます。そういう意味でも全力投球で行ってまいりました。そして、過去に執着するのではなくて、過去、現在、未来という一つの考え方で展覧会を進めていこうということで、ご覧になった委員の皆様もいらっしゃると思いますが、一部、二部、三部構成になっています。一部は建物についてです。過去に遡って建物の価値を検証しないといけないということで、ここを設計された日建設計、それから施工の守谷商会、そして信州大の工学部の寺内研究室、こういったたくさんのご協力を得まして何とか貴重な資料をお見せするまでに至りました。しかし50年前ですので資料がないんですね。それでも何とか集めて、小展示室に資料として発表することができました。改めてご覧になれば、いかに林昌二さんが善光寺やこの辺の地域の特徴を研究して、明確なコンセプトで建てられたということがだんだんわかってきました。今になって、この建物のすばらしさを再認識しております。ぜひ、またお時間があれば、後でござらんっていただきたいと思ひます。

それから2番目の現在については、県民との対話ということです。県民の方から投票いただ

いた得票数の高い24点を展示しております。そして未来に向けてということで、若手作家にこれからの新美術館につなげるような形で発表していただく、こういう三部構成で行いました。

そういうことからしますと、この協議会も、過去、現在、未来、いろいろな面からご協議いただければと思っております。

それから、副館長が先ほど申し上げましたように、人事の面では、昨年度まで3年間務めました中部副館長にかわって奥村が副館長になり、それから2年半の間、学芸課長がいなかったのですが、このたび、新しい美術館に向けて中心になって働いてもらう田中が課長として着任いたしましたので、ここでご紹介しておきます。

また、今年29年の1月1日に整備室ができました。設計、建築に向けて進めていきますけれども、室長がちょっと遅れるということで、霜田主査が今、出席しています。後ほど出席されたところで報告という形になります。

以上、何か進行的な内容を含めたあいさつになりましたけれども、よろしく願いいたします。

○奥村副館長

それでは今、今年度の最後であり、初顔合わせの委員もいらっしゃると思いますので、大変恐縮ですが、各委員から自己紹介をお願いしたいと思います。

着席順で、大月委員のほうからお願いいたします。

○大月委員

大月ヒロ子と申します。よろしく願いいたします。

美術館出身ですけれども、今は東京と岡山とで活動しております。博物館づくりとかもやっておりますけれども、コミュニティの廃材をクリエイティブに活用するような、そういった活動の実験室を持っていて、拠点が少し広がって、現在は面的に活動を実施しているところです。

あと、岡山県の文化芸術アソシエイツという仕事をする事になりまして、この8月から活動を併走するようにやっております。どうぞよろしく願いいたします。

○小坂委員

信濃毎日新聞社の社長をしております、小坂でございます。

私は美術の専門の知識も素養もございませんが、小学生のころからこの信濃美術館に親しんできたというようなこと、あるいは、また読者の視点というようなことから役に立つ意見を発言できればいいなと思っております。よろしく願いいたします。

○猿渡委員

猿渡です。この3月まで準備室時代から非常勤時代を含めて35年間、横浜美術館の学芸員として働いておりましたが、現在も同じ財団が運営します大佛次郎記念館の美術のほうの仕事ですとか、あと三溪園にも三溪記念館という美術館がございまして、そちらのほうの仕事もあわせて行っております。どうぞよろしく

お願いします。

○中平委員

中平紀子と申します。長野県美術教育研究会の研究推進員をしております。現在、小布施中学校の美術の教員をしております。

信濃美術館さんとは教育普及プログラム等を一緒にやらせていただいたり、中学校に美術館の作品をお借りして授業をさせていただいたり、いろいろ実践させていただいてきました。今

後、またそのような教育的にさらに発展できればいいなと思います。また、教育の視点からしか申せないと思いますけれども、よろしく願いいたします。

○若麻績委員

善光寺の総長の浄願坊住職、若麻績信昭でございます。

昨年の4月から事務総長に就任いたしまして、それからこちらのオープニングセレモニーのときには必ず出席させていただきまして、時間は限られておりますけれども、自分の時間を使いながら、そのときの展示物を見せていただきまして、本当に素晴らしい作品を目にすることができました。これからもよろしく願いいたします。

○和田委員

信州大学の和田と申します。信州大学の繊維学部は、上田市にあり、先進繊維・感性工学科の学科長を務めさせていただいております。その中に2つのコースがありまして、特に感性工学コースのほうの領域をメインとしております。実は数年前まで、私、私業を営んでおりました民間にいました。2つの電気会社、それから自分で事務所を立ち上げて、主に商品計画ですとかプロダクトデザインのほうをメインの領域としておりまして、美術とは直接、本当に顔をつきあわせてという経験は少ないんですけれども、ずっとものづくりをさせていただきまして、そういった中で実は多くのアーティストだとか工芸家の方だとかとおつき合いがあって、そういう方たちの話を聞きながら、まさに先ほど館長がおっしゃられた過去、現在、未来というお話ということのを伺いながら、今度はものづくりではなくて人づくりをしたいということがありまして、大学のほうにお世話になりました。

やがて、ひとつづくりがだんだん地域との密着型になっていくと、まちづくりという方向に少しずつ傾いていったりしております。そんな者ではございますが、お役に立てることがあればということで参加させていただいております。よろしく願いいたします。

○奥村副館長

どうもありがとうございました。なお、本日所用のため、石川委員、バーナー委員、渡辺委員が欠席であります。また、古田委員が少し遅れるというご連絡をありましたので、ご報告させていただきます。

続きまして、本日出席させていただいております、事務局側職員の自己紹介をさせていただきます。まず、当館職員から自己紹介させていただきます。

○田中学芸課長

4月より学芸課長として着任いたしました田中正史と申します。3月までは栃木県の日光の美術館にありまして、そちらでは開設からかかわっておりました。よろしく願いいたします。

○瀬尾研究主幹

同じく学芸員の瀬尾と申します。よろしく願いいたします。

○木内主任学芸員

学芸員の木内です。よろしく願いいたします。

○上沢学芸員

同じく学芸員の上沢修です。よろしく願いいたします。

○和田総務課係長

総務課の和田と申します。よろしくお願いいたします。

○奥村副館長

次に、私どもの職員の母体でございます、一般財団法人文化振興事業団職員から自己紹介させていただきます。

○松本常務理事

今、ご紹介をいただきました、一般財団法人長野県文化振興事業団の常務理事の松本と申します。よろしくお願いいたします。

○奥村副館長

それでは最後に長野県県民文化部、文化政策課信濃美術館整備室職員から自己紹介をお願いいたします。

○霜田信濃美術館整備室主査

館長からのお話にもありまして、今年の1月から信濃美術館整備室が県庁につくられ、日向室長が参りました。本日は他の会議で遅れて参ります。私は、信濃美術館整備室の霜田と申します。よろしくお願いいたします。

○奥村副館長

それでは、会議にこれから入ります前に、会議資料のご確認をお願いいたします。

先日、事前に送付させていただきましたものですが、協議会の「会議次第」、「展覧会入館者一覧表（平成25年から29年度）」、「平成28年度展覧会事業実施状況」、「平成28年度教育普及事業実施状況」、「長野県信濃美術館・東山魁夷館展覧会のご案内」の年間のパンフレットで三つ折のもの、「平成29年度信濃美術館展覧会・引越計画表」、「平成29年度展覧会事業実施状況」、「平成29年度教育普及事業実施状況」、報告事項資料といたしまして、「信濃美術館の基本設計にかかる県民ワークショップの開催について」、「信濃美術館整備事業における設計者の選考について」、「信濃美術館各室の主な利活用方法、仕様、（事務局中間とりまとめ）」と「信濃美術館整備事業各室相関関係の検討（案）」の資料でございます。

また、本日追加資料としてお配りしたものといたしまして、「出席者名簿」、「配席図」、先ほど最後にお配りしました、信濃美術館整備室からの「信濃美術館整備事業県民リレーワークショップ」の3点が本日、追加した資料でございます。不足等ございましたら、ちょっとおっしゃっていただければと思いますが、よろしいでしょうか。

それからお願いでございますが、各委員ご承知のとおり、当協議会の会議録につきましては、県の信濃美術館整備室のホームページに後日掲載することになっておりますので、会議録の作成後、各委員の皆様にご確認いただきたいと思っておりますので、その節はよろしくお願いいたします。

その次に議長でございますが、当協議会は館長の諮問機関として位置づけられておりますので、以後の議事は館長が進行いたします。では、橋本館長お願いいたします。

3 議 事

(1) 平成28年度事業実施状況について

○橋本館長

それでは私が議事の進行をさせていただきます。おおむね終了は3時半ということで、議事を進めさせていただきたく存じます。よろしくお願いいたします。

それでは最初に議題3（1）平成28年度展覧会等事業実施状況について、事務局から説明をお願いいたします。

○田中学芸課長

平成28年度展覧会事業実施状況につきまして、お手元の資料と、プロジェクターの画面をごらんいただきながらご説明をさせていただきます。

「展覧会入館者一覧表（平成25年から29年度）」、「平成28年度展覧会事業実施状況」、「平成29年度展覧会事業実施状況」資料により説明

○橋本館長

途中ですが、日向室長がいらっしゃいましたので、あいさつをお願いいたします。

○日向信濃美術館整備室長

それでは、ちょっと別用がありまして遅れてしまいました、美術館整備室の日向と申します。よろしくお願いいたします。

本日、最後のほうに少しお時間をいただきまして、今、進めております美術館の設計の関係で少しお話をさせていただく予定となっておりますので、よろしくお願いいたします。

○橋本館長

田中学芸課長がどんどん走りまして、私、28年度という報告をいたしました。29年度まで報告してもらいました。多分、時間を考えてのことだと思いますが、ひとまず話し合いのほうは28年度から進めたいと思います。

1年前のことで、また冬の会議でも触れましたけれども、改めて28年度全体を通してご意見、ご質問等ございましたらよろしくお願いいたします。または感想でもかまいません。

中平委員は初めてなので、例えば中学生や小学生というのは、東山魁夷作品についてはどんな印象なのか感想を持っているのでしょうか。現場の話をちょっとしていただければと。

○中平委員

東山作品については、感想のきっかけとしていろいろあると思うんですけども、こう対照的な構図だったり、そういうところから入る場合もありますし、絵の中に物語性を感じ取るような感じで、鑑賞のきっかけとして入っていくことが多いと思います。

特に小学生だとそうなのかなと思いますけれども、中学生になると、日本画だとか、そういう切り口から入っていったりだとか、いろいろな情景を考えていくというようなこともあると思うんですけども、非常に生徒たちも興味深く鑑賞すると思います。

○橋本館長

ありがとうございます。後半の村田コレクションについて、前は冬でしたので、瀬尾から補足したいと思います。

○瀬尾研究主幹

昨年の村田コレクション展は、西洋の民藝の粹という展覧会です。これを持っておられた村

田新蔵氏という方は長野県安曇野市にお住まいです。元は埼玉県にいらっしやったんですけれども、そこで4,000点ぐらいの西洋民藝の作品を集めておられました。

内容は、ヨーロッパ全域にわたる生活工芸で、それを集めておられた。1989年ですか、長野県のほうに移ってこられて、持ち主の新蔵さんはお亡くなりになられたんですけれども、奥さまがその作品を保管されていて、非常に貴重であると。日本民藝館の方々にもお話を伺ったんですけれども、この種のコレクションでは日本で有数のものであろうということで、当館でも昨年その展覧会をいたしまして、それで先ほどもありましたけれども、ウィンザーチェアの展覧会にもそのコレクションの中から30数点ほど出していただきました。

その後、展覧会のカタログはつくったんですけれども、それ以外の収集された作品全ての写真とデータを入れた資料目録というものも作成いたしました。日本全国の愛好家の方、研究者の方にもお配りして、その作品、コレクションのすばらしさというのを見ていただいたところ です。

今もって、その村田ご夫人がご自宅に大切に保管されておられて、この後、将来、どういふふうになるのか気になるところではあります。

○橋本館長

ありがとうございます。それでは、今、ウィンザーチェア展も話題になってきましたので、29年度、本年度も、田中のほうから説明がありましたので、含めてご質問、ご意見あればと思います。

とりわけて、この村田さんの収蔵した展覧会と今回のウィンザーチェア展は、なかなかほかのところでは引き受けるのも難しいし、展覧会をやるのもなかなか工夫が必要なんです。私たち県としてはやはりやるべきだということで行いました。当然ながら、こういったことに関心、興味を持たれている方は少ないんですけれども、あえて入館者数は別として、やり抜くことができるのではないかとということで実施させていただきました。

ご専門のほうで猿渡委員さん、平面作品ではなくて、こういった工芸品についてはいかがでしょうか。

○猿渡委員

美術品、純粹美術の作品ではなくて、私たちの日々の生活により身近なものを美術館で展示することによって、おそらくこれまで美術館に足を運んでいらっしやらなかった方も美術館にいらっしやる機会になったことでしょう。日本では民藝という歴史もあって、それが今も、普通の人たちも含めて愛されているという土壌があります。あまり純粹美術にこだわらずに、日本ではもともと茶道、茶の湯ですとか華道、あるいはふすま絵といった、生活の中の美学を大切にし、かつそれを育んできたという伝統もありますから、これからもこういうことが可能であれば、挑戦していくのはとてもいいことじゃないかなと思います。

○橋本館長

ありがとうございます。大変貴重なご意見ありがとうございます。

大月委員さんどうでしょうか。マイクがなくてすみません。新しい美術館だとかいうのも解消しますし、画像も暗くてわからない、これも新しい美術館になれば全て解消できると思います。すみません。

○大月委員

この県内でお持ちのそういうコレクション、きちんと調査をされて、それをちゃんとデータ化して展覧会にも生かしながらというのはすごくすばらしい、私は地域のこういう公立の美

術館がやるべき仕事だなと思います。

今回、ウィンザーチェアという切り口で展覧会を一つつくられましたけれども、きっとまだほかの切り口でも行けそうなコレクションなのではないかなと思いますし、そうやって丁寧に育てていくというか、調査と展示というのが分かちがたく存在しながら、来てくださる方たちに還元していくという、そういう流れはとても大切でいいことと思います。

こういうことをやっていますというアピールも、公的に住民の方たちにもなさるといいと思いますし、そういったことを聞かれて、今までは外に言っていなかったけれども実はこういうコレクションがあってみたい、県内の隠れた何か、さまざまなおもしろいものが発掘できるかもしれませんし、何かそういったお仕事は、途切れることなくされるといいなと思いました。

○橋本館長

それでは、お忙しい中、東京から駆けつけてくれました古田委員さん、一応、自己紹介という形で皆さんにお願いしましたので、自己紹介をお願いいたします。

○古田委員

遅れて申しわけありません。東京藝術大学の古田と申します。よろしく願いいたします。

○橋本館長

またよろしく願いいたします。

それからフランス風景画展は、信濃毎日新聞社さんが共催で、お力を入れていただいて、その影響があつてたくさんの方が来られました。社長である小坂委員さんから一言何か、一鑑賞者としてでもいいですが、よろしく願いいたします。

○小坂委員

私どもこの美術館でかかわって、共催とかいう形でやらせていただく展覧会に関しては、多くの場合に、この記事で幾つか紹介しながらこの見所、読者の皆さんに紹介するというようなことをやっていて、それは割りと、動員とっては変ですけども、興味を持って足を運んでもらうことに役立っているのではないかなというような気がしまして、いろいろなメディアを使って、例えばこのウィンザーチェア展というのは、興味のある方には非常に面白い展覧会でしょうし芸術的意味もあるんでしょうけれども、多分、知らない人のほうが多いんじゃないだろうか。そして私もこれ見ないで、実は会場に足を運んでいなくて、見ないで言うのも何ですけれども、写真を拝見すると全部同じようにというようなこともありまして、ですので、せっかくやるのであれば、何かこの、知らない分野に興味を引くような紹介の仕方というか、ウィンザーチェアといわれてもなかなか思い浮かばないので、何かこう、へえ、そういうものがあるなら見てみたいというような紹介の仕方を工夫していくことがいいのかなと。自分は知らなかったけれども、これおもしろそうだな、見て見たいと思うような告知なり、そういうことを考えていかれるといいのかなと思いました。

○橋本館長

実際、こういったものをやると、やはり広告、宣伝の内容をやはり工夫しなければいけないなとつくづく感じました。

ただ、やはりいらっしゃるとわかると。来るまでがなかなか、椅子だけを興味を持ってこられるというのはなかなか難しいという部分はありましたけれども、いらっしゃれば、本当にあれだけ一堂に椅子が並んだというのは、都内でもなかなか見ることはできないので、大変よかったです、そう思っております。

プロダクトということで椅子、椅子に別に関係しなくていいですけれども、展覧会全体を通してお願いします。

○和田委員

では、まずは椅子の話からですけれども。プロダクトデザインでは、実は3つのタフアイテムと呼ばれているところがあるんですが、照明器具と事務機器と、実は椅子がそうなんです。非常にタフビジネスで、改めてもう既に100点、1,000点、10,000点という作品がある中で改めて椅子をデザインする、照明器具をデザインするというのは非常に難しい仕事となってきています。デザインが意識されるのは20世紀直前のアーツ・アンド・クラフツ運動からデザインという言葉が行き始めるわけですけれども、ほかの展覧会でも特徴は広くざっくり、例えば300年をクルッと振り返るものと、こうやって単焦点で見つめる部分と、幅が広くて、そういった意味で全般的にこの広さ、狭さの柔らかさがあつていいかなと思ったんです。ウィンザーチェアの場合ですと、デザインが意識される前のチェア群になるわけです。ではデザインが意識され始めたころの、例えばイギリスであればグラスゴーのマッキントッシュのチェアであるとか、やがて近代的なチェアが生まれていくといったところの、そのある部分を見つめたときということと、またいつか広く見たときにはどういう展開をしていくか。日本人が実は椅子の文化がなかった生活から、日本人作家あるいはデザイナーの名前がポツリポツリと登場し始めるという、そういう時期のことを考えると、デザインというだけじゃなくて、例えば自動車ですとかゲームですとか、日本と欧米がスタートラインが同じものは競争できるんだけれども、実はスタートラインがずっともう何百年と差が開いたりしているというのは、なかなか日本人が追いつけないとかという、そういう文化の流れをまた感じていただけるような展覧会があると、何か楽しいのかなという気がしました。

何人かの先生方がおっしゃっているように、普段なかなか見ないものを改めてこういう場で広げて見せるということはやっぱりすごい素敵なことだと思いますので、これからもその企画の一つの見方として、企画展の一つの見方としてそういったものを据えていただけるといいかなという気がしています。

あともう一つ民藝、先ほど話が出ましたけれども。生活に密着した部分で、どういう人たちがどういう考えを持って、あるいはその生活文化を花開かせてきたか。あるいは気がつかないまま、いつの間にか日本人すぐそばにこんなものがあつたよねというようなことを改めてスポットライトを当ててみるということが非常に、特に大学とかに入って初めて専門性を持って知るような部分を小学校のころから、あるいは中学校のころから知ってもらうのも大切なことなのかなと。

今のお話を聞きながら、皆さんさまざまな視点で見ておられるもので企画してということで、何かいいところをまた改めて、また過去の展覧会にもう一度、足を運んでみたいかなというようなことを思わせていただきました。

○橋本館長

ありがとうございます。若麻積委員さんには、いつもお近くでたくさんごらんになっていただいていますけれども、昨年から今年にかけて何かご印象に残った展覧会はございますでしょうか。

○若麻積委員

昨年のジブリ展からいろいろ見せていただきました。巨匠たちの競演、歌麿、安藤広重とか、この方々は有名な方ですからもちろんのことですけれども。ジブリを見たときに、それぞれの色使いがとてもすばらしい色使い、本当にそれぞれの巨匠たちに負けないような、そんなよう

な感想を持たせていただきました。ジブリのときには本当に大勢の方々においでいただいたので、達成率を見ると477.3%という、とてつもない、本当に大変、今回のような形になったと思います。

また、歌川広重ですけれども、私も数年前から、5～6年前、もっと前かな、東急さんで浮世絵の展覧会をやるときに、その前にうちのほうに持ってきて、どれか買ってこれというように、広重さんの作品を5点ぐらい買わせていただいたので、その作品、私の持っている作品とこちらのほうで展示された作品と比べてみたりという、そういうような感じで大変、おもしろく見せていただきました。どうもありがとうございます。

○橋本館長

どうもありがとうございます。古田委員のお尋ねしますけれども、藝大の美術館は最近わかりやすく伝えようとしていますよね。そういう工夫を、何度も見て感じるんですが、どう見せたらいいかということも含めまして、何かお願いいたします。

○古田委員

ありがとうございます。例えば私がかかわりました「雪村展」という展覧会では、一つの試みとしまして、展覧会につける、作品のところに付ける解説キャプションです。これをやや、表現が難しいんですけども、子どもにもわかるようなというようなコンセプトでかかわりました。それは、展覧会図録ではかなり専門的な内容、それに対して来館者には、お子さんでも、それから知識のない方でもころ見るとおもしろいですよという、そういったつくりをしてみました。まあ賛否はあったわけです。

何か思い切ってやっていかないと、こうなっていますからいつもこうやっていますというのでは、やはりこれから済まないんじゃないかなというような、漠然としてそのことはありまして。それは1回だけだと思いつきになってしまうわけですけども、美術館として毎回工夫しながらその展覧会その展覧会に合ったことをやるという、それに尽きると思うんです。

ですから、私たちの美術館もそうなんです、雪村をやったとすれば、今度、皇室展をやったり、同じことをやるということがそもそもできない。今、このラインナップを拝見すると、ジブリがあって、広重があってということですので、やはりその1回1回の展覧会のことをどう伝えるかというのは、毎回、もちろん違うわけですので、そこに何かやはり工夫というのか、見える形でやっていくことが、結局は来てくださる方に伝わるのではないのかなと思っております。

○橋本館長

キャプションや文字だけでなく、絵柄を入れたり、藝大の収蔵品はこれですという場合には、色分けもしてしまいましたよね。東山魁夷の場合は決まっていますから、これはなかなか変更しにくいんですけども。新しい美術館に向けて、そういった見せ方というのは非常に重要だなというのを学ばせていただきました。ありがとうございます。

それでは時間も限られていますので、その他の点で田中からお願いいたします。

○田中学芸課長

先ほどは失礼いたしました。それでは、平成28年度教育普及事業の状況についてご説明いたします。

「平成28年度 教育普及事業実施状況」により説明

(2) 平成29年度事業（予定）について

○橋本館長

ありがとうございます。続けて、平成29年度教育普及事業実施状況の説明をお願いいたします。

○田中学芸課長

では続いて、平成29年度教育普及事業の実施状況について、ご説明いたします。

「平成29年度 教育普及事業実施状況」により説明

○橋本館長

今、思い出すと、猿渡委員さんには、4～5年前アドバイスをいただいて、それを実現しようと、結果として門前プロジェクトという形で、地域との密接な関係ができました。ありがたく思っております。それから大月委員さんどうですか。昔、ご一緒に出席していた平成18年ごろの協議会のころから、こういった活動を見て、違いなどがもしありましたらお願いいたします。

○大月委員

今日、上がってくるときに、拝見した作品が印象的でした。皆さんが協力してインスタレーションの輪ゴムをつなげてつくられたという状況を私は知らなかったんですけども、とてもいい風景ができていました。でも、輪っかをつなげるのは大変だろうなと思っていたので、今、それがワークショップとして出来上がったというのはいいことだと思いました。

何か、作家が全部つくるのもいいと思うんですけども、何かそこに自分も加わって作業をしたということで何か美術館の場所とか、あるいは作品というものに対する思い入れというか、自分化みたいなものがなされると、館が非常に身近に感じて、また行って何か手伝おうとか、一緒に何かしたいなとか、あそこで何か自分は育てられたなというみたいな、そういった記憶が積み上がっていくと、いいなと思いました。

それから、これも時代だなと思ったのが、朝ヨガをされているというのも白い試みだと思いますし、そういう食欲にいろいろな試みをされていく、そのオープンな風通しのよい事業を今後も展開されていくと、素敵だなと思います。

○橋本館長

10年前ではこういう感覚はなかったんですが、ヨガまでもやっていると。それからブロガーなんていうのは本当に最近じゃないと発想しないものですが、かなりの人が集まってくるんです。プロ的な取組みをされていたり、プロもいらっしゃるんですね。このように新しい時代に乗っていかないと、やはり美術館はいけないなと思っています。

ご指名はもうよしますので、どんどんお願いいたします。時間も押していますので、では小坂委員お願いします。

○小坂委員

今、館長がお話あったブロガーですね。フランス絵画展のときに私も何人かいらっしやっているのを見ましたけれども、その波及度というのかはどんなふうな様子か教えていただきたいです。

○木内学芸員

それぞれのブロガーの方がアップされているフェイスブック等の閲覧数までは、こちらのほうで把握できてはおりませんが、当館のブロガー内覧会に関して、それぞれの方がアップしたのものについてこちらにご報告をいただいて、そのページをチェックさせていただくということはしております。

SNSで美術館が発信する以上に、さまざまな方がさらに拡散していくという、今どきの手法を、積極的に取り入れたという形の広報です。

特に東山魁夷館のブロガー内覧会というのが一番初めに当館で行ったブロガー用の内覧会です。こちらに関して言えば、全国的にかなり遠くからも参加者がいらっしゃいました。ブロガー内覧会が今、美術館で流行っているので、その内覧会に応募をしてそれを目的にご夫婦で旅行されて、ご夫婦とも自分のフェイスブック等を持っていらしてアップしていくというようなことをやっているんですとおっしゃっていた方がいらっしゃいました。もうそういう時代に入っていると思いました。

東山魁夷館は、通常は一切、撮影禁止というところですので、平面絵画、特に巨匠の絵画を、写真で撮ることができるということが喜びで、それをまた自分のページでとりあげることができるというのは非常にいい機会で、それはありがたかったというようなお話をいただきました。

ブロガー内覧会の場合には、ブロガー内覧会に関して著作権者の方にご許可をいただいて実現しているわけですが、このように目的を限定すれば、著作権の許可も得やすいと感じたところです。

○橋本館長

猿渡委員さん、お願いいたします。

○猿渡委員

つい先立って、横浜美術館では横浜トリエンナーレという大規模な現代美術の祭典がオープンしたわけですが、そのオープニングでは何と全く撮影が自由だったんですね。若い方も中高年のカップルの方なども自分の好きな作品とか、これはおもしろいというような場面で写真を撮りまくっているという状況が展開されていました。これは初めてのことでしたが、おそらく出品者の方々のご了解を得てやっていると思うんです。

それからちょっと経った9月2日に、大佛次郎記念館で生誕120年記念として、この40年間で初めて無料デイを実施しました。もう一つは、外国人観光客誘致が、今、横浜でも盛んに行われていて、三溪園も含めて非常に数字が伸びております。バイリンガル対応のオープンハウス(9月2日)は、1年ほど準備して行いました。土曜日たった1日だけだったんですけど、何と1,100人の方が、通常の10倍の方がいらっしゃったんですね。もちろん幾つかのプログラムを用意しまして、小さい子でも木版画の摺りが体験できるとか、外国人の方でもティーセレモニーの真似事ができるとか、大佛次郎の趣味とか生活を絡めてのプログラムを企画したわけです。予想外だったのが、皆さんが建物内部の細部の写真を自由に撮ってらしたということです。

当日は撮影を禁止しませんでした。反対に私たちスタッフが要所要所に立って、浦辺鎮太郎さんという倉敷のまちづくりに非常に貢献された建築家の作品ですので、ここが面白いんですよとか、あそこをごらんになりましたかという声がけをしました。これまで文学館ということでちょっと敬遠していた方々もお子さんを連れて来館されました。インスタグラムですとかツイッターとかで、記念館の写真が相当、拡散したのかなということを、職員一同、強く感じました。

○橋本館長

貴重なお話、ありがとうございました。いかがでしょうか。

それでは、時間が限られていますので、また、もし後半でありましたら重ねて、今のことなどについても結構ですので、よろしくをお願いします。

それでは引越しについてお願いします。一応、ひとまず展覧会等が終わりまして、以後のことについてお話しします。

○田中学芸課長

それでは平成29年度信濃美術館の展覧会、引越計画などにつきまして説明させていただきます。

「平成29年度 信濃美術館 展覧会・引越計画表」により説明

○橋本館長

それでは、多分、次の報告のほうの皆様にも関心があると思いますので、またこの引越しも含めまして、後ほどご意見、ご質問等があればお願いいたします。

4 報告・その他

(1) 信濃美術館・東山魁夷館の整備について

○橋本館長

続きまして4番目の報告・その他に入らせていただきます。

それでは整備につきまして、日向室長から現在の状況を報告していただきたいと思います。

○日向信濃美術館整備室長

信濃美術館整備室の日向です。委員の皆様にはあらかじめ送らせていただいた資料がホッチキスどめのもと、本日A3版を折った紙を配布させていただいております。これを使いまして現在の建物整備の状況について、お話をさせていただきます。

「信濃美術館の基本設計にかかる県民ワークショップの開催について」、「信濃美術館整備事業における設計者の選考について」、「信濃美術館各室の主な利活用方法、仕様、(事務局中間とりまとめ)」、「信濃美術館整備事業各室相関関係の検討(案)」、「信濃美術館整備事業県民レビューワークショップ」により説明

○橋本館長

ありがとうございました。図などがなかったのでイメージが多分、委員の皆様によって違うのではないかなと思います。わからないところは、どうぞこの機会ですから、ご質問等あればお願いいたします。

今、県民の方のお声を聞き、ご要望等をお聞きしながらやっているもので、生みの苦しみと、生みの楽しみが、両立している段階だと思います。

○和田委員

2点ありまして、先回の協議会で変わらない部分と変わっていく部分と、その両面を見ていったときの設計の方向、このコンセプトはどうなるんだろうというお話があったと思うんです。特に館長を初め、学芸員の皆さん方に本当にここで働かれて、ずっと見守ってこられた方から、哲学としてこういう美術館になってほしいと言った、それは変わらない部分でありましょう。あるいは、先ほど出ているSNSにかかわる部分から時代の流れに沿った部分と流れに両方、変わっていく部分と両面あって、ただ、それは別々のものではなくて、きっと根本は一緒だと思うんです。世の中が流れていくものから本質を見つめて、やがて、変えてはいけない部分はこうだということを、この選定された事業者の方に、何らかの形で伝えられると思うので、その辺がまず一つ大事なことです。

それから、多分、市民からは現在での要求が出てくると思うんです。ブロガーの方々とか、これから50年、例えば逆に50年前にさかのぼったときのことを今見ると、全くその世相も人々がかかわっているものが変わってきているので、今のままで、多分もうおわかりになっていると思うんですが、今のままの要望をそのまま丸呑みするということとはやっぱり違う方向がある。となると、50年後を考えるとということもあるんですが、まずは変えない思想みたいなところの部分と自由に変われる部分と、両面を持っていただく方向では。10月7日というともうすぐなんですけれども、どうなるかということをもっと見つめていただければというのがもうひとつの点です。

館長から以前、誰でも言ってきたこととおっしゃられたんですけれども、ランドスケープして見たときのという、善光寺さんのことから、導線方面から考えて、その人の流れというものがある、人が流れた後、景色がどういったところから美術館が見えてという部分と、まちづくりに相当する部分と、その部分が何かすごく大切なというふうな、その2点、気になっているところです。

○橋本館長

では日向さんから今の2点を。

○日向信濃美術館整備室長

設計者ではないものですから、私のほうでお答えできるかどうかというのがあります。

やはりこの場所につくるということは変わらないわけです。善光寺さんとか城山公園のある場所にあるということ、そこを生かす。宮崎さんがいろいろなりレー・ワークショップのときに、その都度その都度おっしゃっていることは、建物が主張せずにこの風景の中に溶け込むような外観なり建物なりにしていきたいと。

少し天井高を抑えたものにすることによって、今まで見えなかった市道の東側が、今ある城山公園の東側のところの10mぐらい、高いところからこの善光寺さんに向かった眺望というのが新たに開けてくる。この土地が持っているものを新たに気づいてほしいということ、そういうようなことをやっていきたいということをおっしゃっています。

それからあと一つ、確かに50年先のこと、どこまでそれができるのかわからないのですが、よく宮崎さんがおっしゃっていることは、かつて宮崎さんは大学を卒業されて槇さんの事務所に入られて、ご担当されたのが京都の国立近代美術館だそうです。平安神宮の横にあります、その当時の美術館、30年以上前らしいんですけれども、全ての入口にチケットを販売するところがあって、それを買って入ると。ところが今は、美術館ではそういったことももちろんそうですけれども、そういったことだけではなくて、チケットを買わずにも入れる空間、あるいは無料ゾーンといってもいいですが、そういったものを、あわせ持った美術館というのがだんだん多くなってきていると。

ですから、今回、私どもがつくった基本構想においてもまさにそのことをお願いしようとし

ておりまして、従来からの博物館法という美術館、これは公開承認施設を目指していきましょ
うと、これはしっかりとつくっていきます。一方で、より公園との一体感を持たせるために、
もっと規制といいますか、制約を下げた形で公園と一体的にできるようなエリア、そういった
ものもあわせ持ったものにしていきたい。今、少しずつはっきりしつつあるという、現段階で
はそのような状況であります。

○和田委員

今の話、かなりコンセプトとしては具体的な部分ではないかと思うんです。実際の運営され
るときのサービスのあり方だとかということを考えて、ただ、そのちょっと前に、ずっと美術
館にかかわってこられた中の人たちからの、いやアウトプット型の美術館にしたいとか、それ
からコミュニケーション型の美術館にしたいとかという考え方とか、例えば僕は見つからない
んですけれども、100年変わらない理想の美術館はこうだという一言だったり、何かそれを、宮
崎さんもさまざまな美術館をきっとやられてきてはいるんでしょうけれども、ここだからこ
その何か美学とか思想が、一言言えること、哲学的なことを一つ、人間発信型の宮崎さんに対
して、宮崎さんも考えられるでしょうけれども、もしかしたら衝突するかもしれないし協調で
きるかもしれない、その辺はわかりませんが、ぜひ何か一つ、信濃美術館はこうこうとい
う一言があって初めて一つのコミュニケーションエリアはこうだとか、ランドスケープ・ミュ
ージアムはこうなるだとかというようなところのストーリーになれるといいなというふうに思
うんですけれども。

○橋本館長

ありがとうございます。それからもう一つは長野ならではの、いわゆる一般的なものはこの
美術館もやっぱり要因として考えるんですけれども、やはり長野ならではの美術館というもの
が何であるかということも非常に大事だと。

それで逆質問ですが、最先端のものをおつくりになってきましたよね。そういう意味でまあ
30年、50年先のものづくりについて、何かヒントめいたものを教えていただければありがたい
んですが。

○和田委員

では2つ、今の話とちょっと繰り返しになるんですけれども。

実はステーブ・ジョブスとかいろいろな、パソコンの黎明期のものからずっとやってきて
いるんですけれども、理想は卵だと言い切って、マーケティングを一切しないで外部のことを
一切聞かずに自分のわがままをずっと通すんですね。設計者が持ってきたアイデアも、金魚
がいる水槽にいれて、まだ泡が出るじゃないかと、まだ小さくできる余地があるようだからこ
んな泡は消しなさいとか、ボタンも全部消しなさいとかというような部分は、実はアイデアで
はなくてもともと持っているその設計段階の、例えば 아이폰であれば通信するアプリケー
ションのものという基本機能の一つ下に、やっぱり理想だとか夢というのが存在しているん
です。それを言葉にして技術設計者に投げかけたらこういうふうに変わっていったりする。

もう一つ、もうスマホなんて、多分、もうしばらくすると陳腐化します。あんな画面だけ触
ってというのがだんだん、実際に触れる感覚の操作がまた復活したりするような時代になっ
ていくと思います。そうすると、今は例えばメディア自身も、平面から変わっていく可能性も非
常にありますし、それは誰も読めないんです。読めないときに最先端のものをやる、何をやる
かということ、やっぱりもう一回繰り返しますけれども、基本に戻る哲学、ソニーが持っている
哲学は何だったかという話をいつかさせていただいたんですけれども、今、言ったようにジョ
ブスが何を考えていたかというようなことも含めて。

ただ、これは特殊なケースだと思うんですね。かつてのソニーとかジョブスというのは、どちらかというとき異色な存在なので、館長おっしゃられたように、では長野ならではのメッセージというのは何があるのか、スキーだとか自然、あるいはここに住まれて活動されてきた方々、生活している方々のこと、よくなっている部分と、全世界で長野、ここしかないというメッセージは何なのかといったところからアイデアが、50年後は読めないだけでも、最先端のことということよりも、それを実現するには他にはないものをするということが一番大事だと。エゴかもしれませんが、ほかにはないことをやるというのが最も大切だと思います。ステーブ・ジョブスもソニーも実は変わっていないんです。ソニーがだんだんへこんでしまったのは、それがなくなったからだと思います。

いろいろな、どこか日本にはやっぱりいつでも最先端を目指すんだけど、実は一番大事なメッセージに目指しているというところ、長野県らしさというのをまたお話いただけるとと思います。

○橋本館長

ありがとうございます。今、本当にたくさんの県民の方からのご意見があるんですが、そういう意味では横浜美術館をつくられたとき、猿渡委員さんは関与されていたのですが、いかがですか、何かこういうふうにしたほうがいいとか。

○猿渡委員

日本の美術館は、一言で言えるスローガンを掲げているところがあまりないように思います。公立とか国立ということで、それを控えているのかもしれないんですが。

私が展覧会の監修という形でかかわった、フランス国立のケ・ブランリ美術館というのがパリのエッフェル塔の近くにあります。現在、ジャック・シラクの名前を冠している美術館です、フランスの国立の中で多くの予算を獲得している、それだけに入場者数も多い美術館ですが、そこはMusée du quai Branly: Là où dialoguent les culturesをスローガンにしています。

さまざまな文化が対話をする場所（文化が語らう場所）というのが、ケ・ブランリ美術館のスローガンです。

横浜美術館の場合は、幕末明治期の横浜開港から全てが始まっている場所ですので、最初のコセプトを設定しやすかったかもしれません。

西洋の文化が最初に日本に入ってきた、文明文化の玄関口であったという歴史的、あるいは地理的な性格をベースとして、作品収集の範囲は横浜の開港から現代までということとなり、非常に明快でした。

多分、役所の方も、美術館の開設準備室、あるいは市民にもそうした共通の認識があったということだけは幸いだったのかなと思います。

○橋本館長

ありがとうございます。古田委員にお聞きしますが、前の学生食堂は、私も知っていますが、限られた土地で美術館がつけられましたよね。そのときの高さ制限とはどうだったんですか、こちらが15mというのは室長から話があったんですが、いろいろな条件があったと思うんですが、いかがなものでしょうか。

○古田委員

申しわけありません。私、そのときにはおりませんでしたものですから、現在の美術館の設計の事情というのはちょっと詳しくないんです。ほかのことでよければお答えしますが。

○橋本館長

ご要望とか、ご意見ございますか。

○古田委員

今、猿渡さんのことを聞きながらちょっと考えたことですが、もう既にこちらは50年、50周年を迎えられて、これは相当な歴史を抱えているといってもいいと思います。結局、我々藝大も今年130年という節目に当たったわけですが、一言で何をやってきたというのはその時代時代が変わっていきますので、ただその積み重ねたものというのは、要するに時代が変わっても美術館の場合には物が残る。その物が残ったことによって次を考える、これが美術館の基本だと思うんですね。コレクション展というのをやりましたけれども、改めてそれを感じたところで、結局、何をしてきたから50年だというのはなかなか言いづらいものもあるかもしれませんが、それを次の考えるヒントには必ずなるわけで、ですからもう自信を持って、この50年を次の50年につなげるという、そういう心持ちがいいんじゃないかなと思って聞いておりました。

○橋本館長

大変ありがたいです。全く新しい建物をつくるのではないということですよね。既に50年の経緯があると。

さっき、ランドスケープが話に出ると善光寺さんに聞かないと。若麻積委員さんは、表現しにくい部分もあるかもしれませんが。

○若麻積委員

今度の設計者になられましたプランツアソシエイツの宮崎さんが、善光寺に来られてお会いしたとき、今までの作品を見せていただき、昨年善光寺と何かと係り合っています。東京のタイ王国の大使館というのが目黒と五反田のところにありますけれども、そのところに何回か通わせていただいた、その大使館に作品があったのに大変びっくりして、ああここで何か我々とつながったのかなというのが、そういう感想がありまして、本当に何となくそこから急に宮崎さんと親しく、親しみを覚えた、そんなような感じに思いました。すみません。ちょっとかかわりがいいかもしれませんけれども。

○橋本館長

いえいえ、ありがとうございます。はい、では大月さん、お願いします。

○大月委員

整備事業の各室相関関係の検討というのを拝見していて、共用展示室、コレクション展示室、企画展示室の脇をずっと貫くというか、バックヤードがあるというのがすごくいいなと思いました。

通路と作業場と倉庫がこの脇を、これどういう関係性にあるかということだと思うんですが、これは非常に重要な場所だと思うんです。さらに事務、学芸とか、そういったところの後ろ側にもこういうものがあるべきであって、このバックヤードという通路・作業場・倉庫、それから県民ギャラリー、多目的ホール、ワークショップ、オープンギャラリー、こどもの広場の脇にもこういうふうにつながるような、バックヤード・通路・作業場・倉庫というのが必要だろうということと、それからレセプションルームとカフェとショップ、この後ろ側にも必要なんじゃないかと思うんです。

美しくその現場を保つということが、公共の館の場合にはすごく必要になってくると思うん

ですが、いつもやはり最終的に場所とりで、こういうお部屋がほしいということになると、バックヤードがもうどんどんどんどん狭くなってしまいます。結果、きれいな状況が保てるのはオープン後数年、しばらくするといろいろな事務機器とか材料とか、そういったものが表に出てきて美しくなくなっていく。管理運営というのは整理整頓だと思うんですね。それを可能にするのは、通路であり、作業場であり、倉庫であると思います。

それから、表現の形態がさまざまになってきているので、これから30年後、50年後を考えた場合にも、作品を搬入するというのは平面の作品を持ってくるだけではない。その場でつくり上げるとか調整をする、あるいはどういう形態のものがこれから生まれてくるかわからない、そういった場合に、作業場というのはすごく必要だろうと思います。

そういった考えからやはりお部屋、同じようなこのバックヤードがあれば対話もそこで生まれたり、あるいは同じ素材をいろいろなところで使うこともできるかもしれない。そういう新しいタイプのバックヤードの解釈というのを、今回、美術館を整備されるに当たって、あまりないと思うんですけども、チャレンジされるのも一ついいのではないかなと思いました。

○橋本館長

まさに将来に向かっての貴重なご意見、バックヤードについては、特に室長さん、我々もかわっているので、どなたか何かありますか。

○田中学芸課長

バックヤードに関しては、その重要性というのは当然、認識していますし、新しく建てても、その後、ずっと運営を続けていくうちには、その役割も含めて変わっていく部分だということは、実際、身にしみて感じていることもあります。

そういう、むしろ今、おっしゃられたような積極的な意味を持たせることを含めて、なかなかそこまでは今までの段階で思いつかなかったんですけども、今後、十分考慮していきたいと思います。

○橋本館長

本当に大事なことで、うちは割りと平面が多い、多かったですよね。今度は現代アートを積極的に取り入れるとなると、今、ご指摘された大きな課題が新たに出てくると思います。そういった点、本当にこれからも十分に考えていきたいと思います。お願いします。

○古田委員

ちょっと思いつきましたが、こちらは重要文化財指定作品は所蔵されておりましたか。

思うに、必ず東山魁夷は重要文化財になると思います。今、この時点で重要文化財を所蔵する美術館になるというつもりで、さまざまな収蔵庫関係、展示室を含めてご準備をされておくほうが、後ではなかなか大変なことになるということもありますので、もう既に収蔵しているつもりで当たったらいいかなと思いました。

○橋本館長

これらについては、皇居新宮殿大壁画の朝明けの潮の約4m近い、長さ14mちょっと、その下絵が出てきたんですね。この後で私、文献を見ましたら、東京で松屋デパートかどこかでも、東山さんがお元気なときにもう展示しているんですね。ですからそれも重要文化財とは別にかなり重要な資料がたくさんあるので、そういったものの扱いも重要だなんて思っております。ありがとうございます。本当に、多分、重文になると私も思いますのでね、大事に扱いたいと思います。

小坂委員さん、整備委員とは関係なく、新しい何かご要望があればお願いいたします。

○小坂委員

先ほどの室長のご説明にもあったんですが、善光寺からこちらへ入ってくる場所の交差点ですね。あそこは南北の交通の面からも重要なというか、車の通りが激しいところで、あそこをうまく越えてもらうことがうんと大切だと思うんですが、どんな方法が考えられるんでしょうか。

○日向信濃美術館整備室長

基本的には長野市の市道なものですから市が主体となるということで、今、設計者がいろいろな案を考えて、長野市と、それから善光寺さんともお話をされています。

方向性としては、まず歩道橋はあまり使われていないので、それは撤去したほうがいいんじゃないかということ。それから、善光寺さんから城山小学校の横を通って美術館のほうに上がっていく道のところが少し広がっていて、ゼブラゾーンの的なものがあります。車線が引っ張ってありまして、あそこの意味合いというのが、少し検討の余地があるのではないかというようなことを、今、宮崎さんのほうが提案されています。長野市さんなり善光寺さんなりにご意見を聞いているというような状況です。

蔵春閣のほうから下っていくと一方通行ですから左右に行くのですが、そのところで渋滞したりして、非常に交通の流れとかが悪くなったりするということをお聞きしています。そのところをうまく改良をするようなことを、市のほうでも再整備委員会の中で議論を進めているところですよ。

○小坂委員

地下道なんていうのもあり得るんですか。

○日向信濃美術館整備室長

善光寺さんの東庭園と城山公園のところを全部地下にしていればどうかというようなご意見もあるのですが、非常に予算的な面があったりしまして、地中化というのは難しいのかなというような状況であります。

○小坂委員

それとハードの面と、あとソフトの面で、やっぱり善光寺にこれだけ年間たくさん来るお客さんにできるだけ来てもらうということが大事だと思うんですが。善光寺さんもつい先日、重要文化財の経蔵の修理が終わって公開されたと、ああいうようないろいろな機会を捉えて、善光寺さんと協力して何か関連展示をすると。

例えば経蔵でも、何か創建当時の密教法具が埋まっていたりそれが見つかったとか、あと経蔵、輪蔵というんですか、あの回す仕組みもよくわかってきたなんていうこともありましたので、そういう、せっかく見たからもうちょっといろいろなことを知りたいなというような人が多いと思うんですね。

ですから、経蔵を見に来たけれども、ではそれについてもうちょっと学ぼうと行って関連展示をやっている信濃美術館に来るとか、そういうような方向でいろいろな機会を捉えて連携するようなこともあってもいいのかなというふうに、思いつきですけども、思いました。

○橋本館長

中平委員さん、作家との関係も深いし、そういう意味で、教育ばかりでなくて県民ギャラリー

一が今度できますよね。そういった活用なども含めて何かご意見、またご要望があればお願いします。

○中平委員

先ほどもお話の中にもありましたけれども、展示するばかりではなくて、そこで作家と一緒に何かつくるとか、レジデンスとまではいわないけれども、滞在して作家がつくるようなことも今、結構、どこかでも行われているんです。そういう意味も込めて、作業場みたいな、つくる場所というのはこれから需要があると思います。

あと50年後を考えて、学校教育の中にももしかしたら美術がなくなっている可能性もあるのかなど。もしくは、小学校まではあっても中学から選択になってしまうとか、そういったことがあるという危惧もしますので、そうした場合、これから美術館の役割はすごく大きくなってくると思います。

もしかしたら、もう鑑賞も制作も美術館になるような時代がもしかしてやってくるのかなどいう、あまり考えたくはないですけども、そういうこともあると考えて、そういった美術に、政策という意味でも触れ合う場というのも重要になってくると思いました。

○橋本館長

経済同友会が平成3年に青写真をつくったんですね。割とそのシナリオどおりに教育が動いているんです。それは、主要教科は、主要と私は言いたくないんですけども、音楽、美術も主要だと。主要教科だけで学校はやり遂げる。英語科もどんどん入ってきていますね。音楽とか美術は地域でやろうというシナリオが20年以上前にあるんですね。着実にそっちへ行っているんです、経済界の力で。

だから、今、悲観的だけれども、それを阻止しないといけないので、阻止する側の先生方だと思いますので、やっぱりこの音楽、美術の教科のよさ、それをやっぱり文部科学省に訴えていってほしいと。あまり50年後はなくなるなんて言わないでください、と思いますけれども。

子どもたちのためにも、よろしく。一言ありますか、そのことで。

○中平委員

そうですね。その阻止するためにも美術が必要だなということも、美術を好きになるきっかけも美術館とか、社会の中でもそういう役割は大きいと思います。学校教育の中だけじゃなく、今現在からも、社会の中でも美術の必要性というのを訴えるのが美術館の役割だと思いますので、またその辺も連携していけたらいいと思います。

○橋本館長

後ろのフロタージュはどうですか。

○中平委員

誰でもできて、まさにいいなと思います。

○橋本館長

ありがとうございます。あつという間に3時半になってしまいました。

それでは、まだ一言、最後という方がいらっしゃいましたらお願いいたします。はい、それで終わりにします。

○和田委員

責任重大です。普段生活していると気がつかないことですが、芸術って人間が一番自由でいられる権利の一つなので、それを多くの人に感じてもらえる、人間の大事な権利なんだという、自由に発想して、自由に描いて、自由につくって、自由に見ていただく、そういったものがいま一度、美術館の原点かと思います。

○橋本館長

わかりました。猿渡さんが、オープニングで写真をとってもいいよというような話がありましたが、どこまでが自由かというのは難しいけれども、まさに今までの概念を壊していかないといけないという部分もあると思いますよね。

本当にありがとうございます。室長から話がありましたように、今、県のほうも施設課が入って、そして私たちとそれから整備室と、整備室の中には私の後を継ぐであろう松本参与が入っています。ですから去年から私の描いていることですが、バトンゾーンでのバトンタッチも何とかスムーズに行っている状況であります。

みんなをよく考えて、そして県民の声を聞きながら新しい美術館をつくっていくという、大きな目標を持ってこれからも進んでいきたいと思います。どうか温かく見守っていただきたいと思います、また必要なときは厳しくも、よろしく願いいたします。

私のほうからはこれで議長の任をとかせていただきます。ありがとうございました。それではお願いします。

5 閉 会

○奥村副館長

本日は本当にご多忙のところ、ご出席いただきましてありがとうございます。以上をもちまして、平成29年度長野県信濃美術館協議会を閉会させていただきます。